

# 2020 年度春学期「教員アンケート」の結果について

流通経済大学 FD 委員会

## 目次

[要約]	1
1. 回答者とその内訳	3
2. 学生アンケートが自身の取り組みの振り返りに役立っているか	6
3. 学生の集中や理解を促す取り組みとそれらについての自己評価	8
4. 成績評価方法とそれらに対する自己評価	13
5. 学生アンケートの結果を踏まえた改善計画	16
6. 特別な配慮が必要な学生への対応	17
7. 対面授業の教育効果や本学の魅力を高める活用方法の提案	19
8. 学生アンケートに関する要望	21

## [要約]

### 1. 回答者とその内訳

・今学期のアンケートには、149名の教員が回答した（専任教員92名、非常勤講師56名、身分不明1名）。回答者数は、すべての学部で前学期に比べて増加し、全体では21名増加した。

### 2. 学生アンケートが自身の取り組みの振り返りに役立っているか

・「学生アンケートが自身の取り組みの振り返りに役立っているか」という質問には、全体の83%ほどの教員（123名）が、「とても役立っている」、あるいは「概ね役立っている」と回答した。

・役立っていると回答した理由としては、「学生の関心・ニーズ・要望を把握できる」、「学生の理解度を把握できる」、「自身の取り組みに対する学生の評価を把握できる」等が挙げられていた。すべての授業がオンライン化されていた今学期は、直接的に学生とコミュニケーションをとる機会が限られていたため、学生アンケートの回答が、授業改善にとって大変有益であったと回答した教員が多かった。

・役立っていないと回答した理由としては、学生の回答の信頼性に関するものが多かった。「少数の学生の回答しか得られていない」、「出席回数の少ない学生も回答できる」等である。また、求めている情報が得られなかったことを理由とする者もいた。「より有益な情報は、独自に行ったアンケートから得られた」、「一部の質問項目はオンライン授業全般に関するものであり、自分の担当する科目についてのものではない」等の意見があった。

### 3. 学生の集中や理解を促す取り組みとそれらについての自己評価

・学生の集中や理解を促す取り組みについては、今学期はオンライン授業に固有なものを挙げる教員が多かった。「資料・教材や授業の内容・方法・進度をオンライン授業にあわせて見直した」、「manabaで毎回あるいは頻繁に課題を出した」、「迅速かつ丁寧にフィードバックするよう心掛けた」、「オリジナルの動画・音声ファイルを作成し公開した」、「授業をライブ配信した」等である。また、それらの取り組みが概ねうまく機能したと回答する教員が多かった。

### 4. 成績評価方法とそれらに対する自己評価

・成績評価方法については、授業期間中に出した課題のみにもとづいて評価した例（77件）が最も多かった。授業期間中の課題に加えて期末レポートを課した例（28件）、授業期間中の課題に加えて期末テストを課した例（15件）がそれに続く。また、それらの評価方法が、概ねうまく機能したと回答する教員が多かった。ただし、例年に比べて評価が甘くなったかもしれないと感じている者も多かった。

## 5. 学生アンケートの結果を踏まえた改善計画

・学生アンケートの結果を踏まえた改善計画については、学生とのコミュニケーションに関する方策を挙げる教員が多かった。「毎回あるいは頻繁に出す課題の最後に、学生が意見や感想を記入できる欄を設ける」、「manaba の掲示板や E メールを積極的に用いる」、「授業時間以外にオンラインのオフィスアワーを設ける」等の方策が挙げられていた。

## 6. 特別な配慮が必要な学生への対応

・特別な配慮が必要な学生への対応としては、「課題の提出締切を延長した」、「外国語で書かれた特別な教材を作成した」、「E メールや電話で個別に連絡をとり、学生を励ました」、「他の部署（国際交流課や教育学習支援センター）に相談した」という回答が多かった。

## 7. 対面授業の教育効果や本学の魅力を高める活用方法の提案

・オンライン授業を対面授業の教育効果や本学の魅力を高めるために活用する方法については、以下のような提案があった。オンライン授業で用いられた各種のツールは、学習支援・個別指導・反転授業・グループワーク・情報の取得や共有を容易化することができ、対面授業の教育効果を高める効果が期待できる。オンライン授業では、時間的・空間的な制約が緩和・解消され、より自由な授業計画や履修計画が可能になる。また、授業を録画した動画をホームページで公開すれば、潜在的な入学志願者に対して訴える手段になり、本学の魅力を高める効果が期待できる。さらに、授業の動画のアーカイブを作成したり、他大学との単位交換を容易化するのに利用したりするのはどうかという提案もあった。

## 8. 学生アンケートに関する要望

・学生アンケートについての教員からの要望としては、アンケートを実施する時期と期間の見直し、回答者数を増やす策の検討、自由記述欄の拡張、出席回数等にもとづく回答資格の制限等、アンケートの実施方法に関する要望が多かった。また、アンケートの集計・報告方法についても、いくつかの要望があった。

以上

## 1. 回答者とその内訳

### ●学部別の回答者数

	2019年・秋	2020年・春	増減
経済学部	35	41	↑
社会学部	34	38	↑
流通情報学部	19	24	↑
法学部	20	21	↑
スポーツ健康学部	19	22	↑
不明	1	3	↑
合計	128	149	↑

### ●身分別の回答者数

	2019年・秋	2020年・春	増減
専任	74	92	↑
非常勤	54	56	↑
不明	0	1	↑

### ●専任教員の回答者数（学部別）

	2019年・秋	2020年・春	増減
経済学部	20	24	↑
社会学部	18	19	↑
流通情報学部	12	17	↑
法学部	9	13	↑
スポーツ健康学部	15	18	↑
不明	0	1	↑
合計	74	92	↑

●非常勤講師の回答者数（学部別）

	2019年・秋	2020年・春	増減
経済学部	15	17	↑
社会学部	16	18	↑
流通情報学部	7	7	→
法学部	11	8	↓
スポーツ健康学部	4	4	→
不明	1	2	↑
合計	54	56	↑

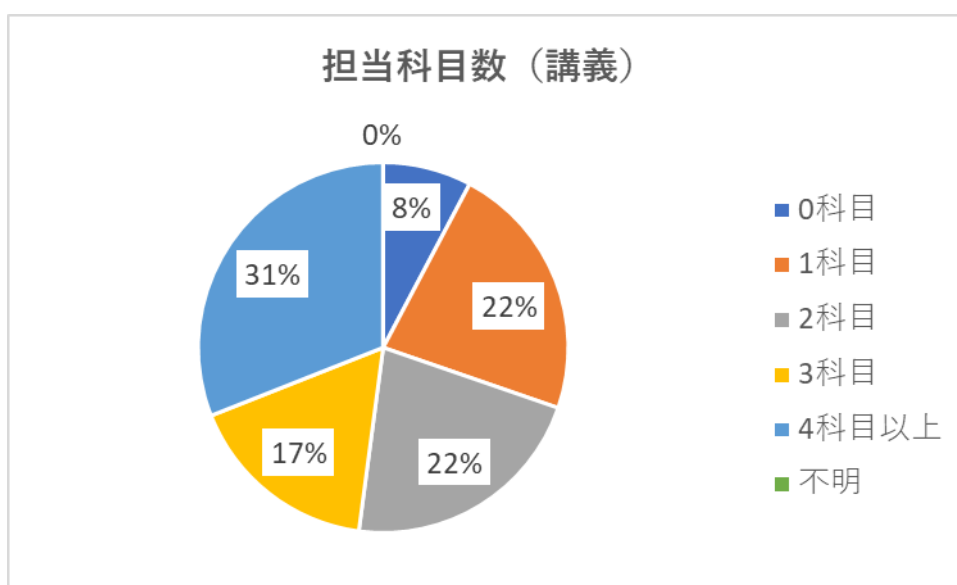
●科目区分別の回答者数

	2019年・秋	2020年・春	増減
専門科目	75	84	↑
教養科目	53	65	↑

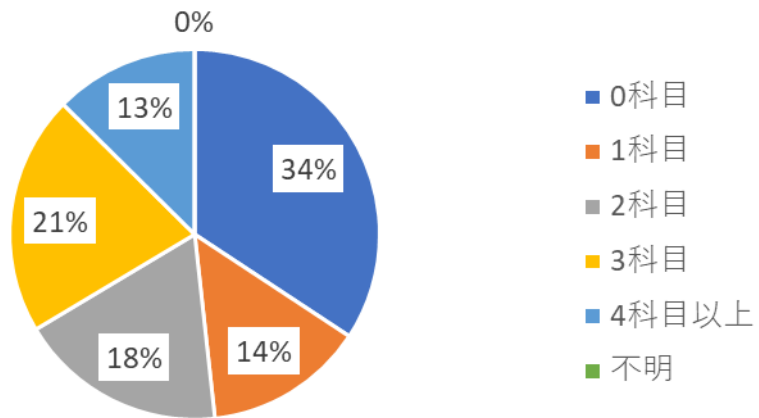
●経験年数別の回答者数

	2019年・秋	2020年・春	増減
1年未満	21	18	↓
1年以上3年未満	19	31	↑
3年以上	87	99	↑

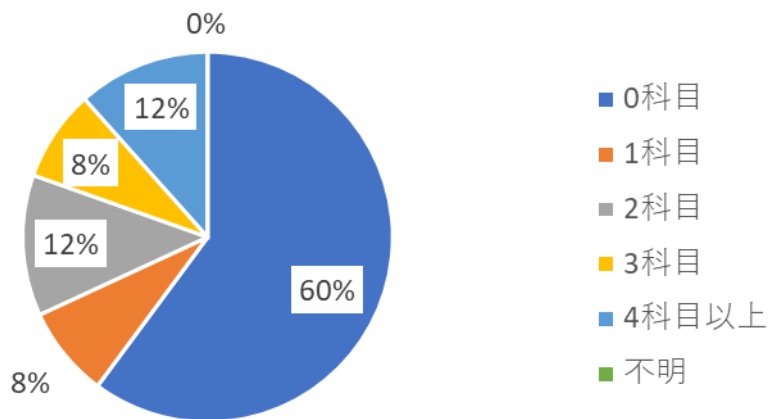
●ひとりの教員が担当している科目の数



担当科目数（ゼミ）

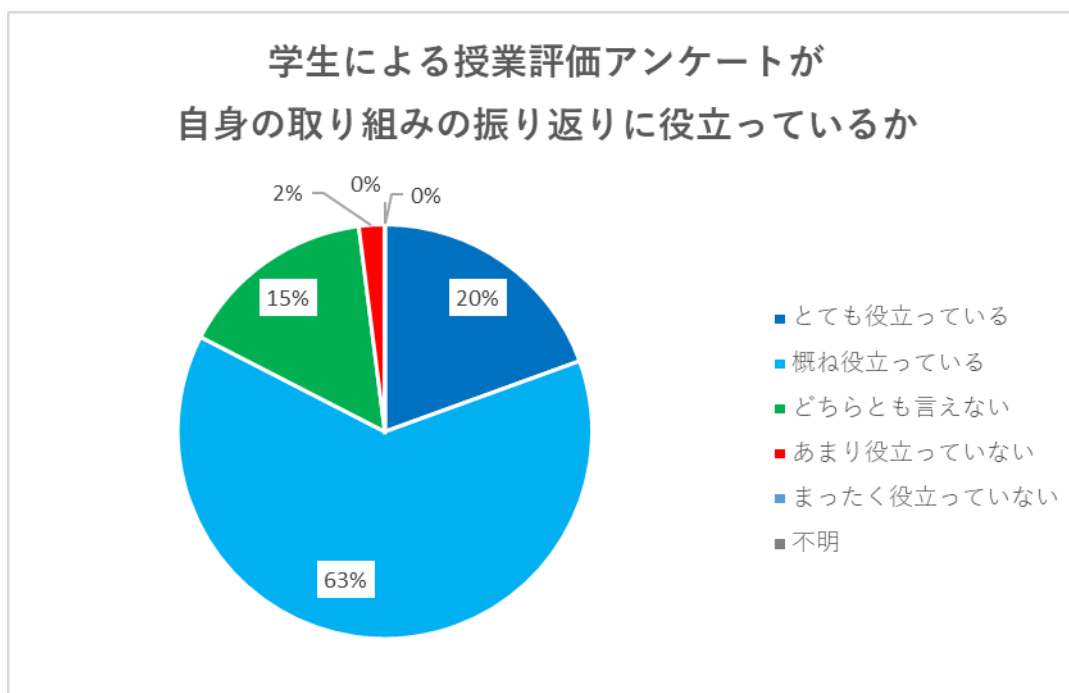


担当科目数（その他）



## 2. 学生による授業評価アンケートが自身の取り組みの振り返りに役立っているか

	2019年・秋	2020年・春	増減
とても役立っている	28	29	↑
概ね役立っている	61	94	↑
どちらとも言えない	30	23	↓
あまり役立っていない	8	3	↓
まったく役立っていない	0	0	→
不明	1	0	↓



### (1) 役立っていると思う理由（主なもの）

#### ●学生の関心、ニーズ、要望を把握できる

- ・学期中に数回、簡易的アンケートを実施したが、全般的な感想を把握する上では、やはり期末の学生アンケートの集計結果が一番参考になると思う。
- ・(匿名であるため、) 面と向かって言いづらい学生の意見を聞くことができる。
- ・自由記述の部分がとても役にたった。「授業内容に興味を持てた」、「配布物の容量が適度であった」、「もっとテストの項目があっても良かった」、「対面でぜひ受講したかった」などの意見や感想は、とても励みになった。
- ・可能な限り学生のニーズに合った授業を展開できるようになる。
- ・オンライン授業では、学生の表情などから興味関心などが推測しにくいいため、特に有益であった。
- ・オンライン授業では、学生の不満を聞いたり、要望を拾い上げたりすることが難しい。アンケートでは、それらが確認できる。

### ●学生の理解度を把握できる

- ・授業の難易度などの確認として、一定の役には立っています。
- ・「分かった」と答えていたが結果が伴わなかった学生の、実際の(主観的)理解度の分散が把握できるため、学期の振り返りに役立っている。

### ●自身の取り組みに対する学生の評価を把握できる

- ・講義中は、一部の学生からのレスポンスしか見えない。アンケート結果は、全体の状況を推察する上で重要な資料といえる。
- ・今年は、遠隔講義という異例の対応を迫られ、教員が一丸となり、様々なアイデアを出しながら、試行錯誤をしつつ、講義を実施しました。それが、学生たちにどのように受け止められたのかを知る上で、大いに役立ちました。また、我々が思いもよらない効果や失策を指摘してくれているという意味でも大変助かり、秋学期はその点を修正して実施しました。

## (2) 役立っていないと思う理由 (主なもの)

### ●回答の信頼性に問題がある (回答者数が少ない、ほとんど出席しなかった者が回答者に含まれている等)

- ・回答者の人数が少ない場合のアンケート結果が、どの程度信頼できるものであるのかは、疑問である。
- ・授業中に回答時間をとったり周知したりしているが、回答率が低い。
- ・オンデマンド授業だと、さらに回答率が低くなってしまう。
- ・講義にほとんど出席しない不真面目な学生の意見が結果に反映されてしまう。
- ・少人数の対面ゼミの場合、「忖度」してくれる学生が散見される。
- ・教科書を買わない学生が結構いる。教科書が必要な授業は評価が低い。
- ・授業の数だけ同じアンケートに答えなくてはいけないこともあってか、学生の回答に"努力の最小限化"が見られる。

### ●求めている情報が得られなかった

- ・独自に学生にアンケートをしながら授業を展開していたため、すでに知っている情報も多々あった。
- ・毎回の授業レポートや最終回に感想を聞いていた。より有益な情報は、そちらから得られた。
- ・匿名性を保たれているかどうかについて、学生側が不安に思っているためか、改善すべき点あまり出てこない。
- ・「通常の対面での授業と今回のような Web 授業を比べて、その良い点、悪い点について書いてください」という問いは、私の授業でなく、オンライン授業全体について尋ねているように見えた。実際、回答内容も、私個人宛てのものは少なかったため、私個人の役にはあまり立たなかった。



### 3. 学生の集中や理解を促す取り組みと、それらの取り組みの成果についての自己評価

#### ●オンライン化にともなう内容・進度・資料などの見直し

・例年よりも詳細なレジュメを準備した。できるだけ図や写真を多用し、学生の理解を促す資料づくりを心がけた（経済）。

・あえて、動画や音声を用いず、学生にスライドを朗読してもらうように依頼した。そのため、聞き流して終わりということにはならなかったはずである。また、スライドの各所に質問を設けて、答えを考えてから次のスライドに進むように工夫した（経済）。

・資料の図表や写真などにマークをつけ、どこを説明しているのかわかりやすくした（社会）。

・通信環境に難のある学生に配慮し、口頭で喋る予定だった内容を全て文章化し、講義資料に載せることで、対面講義と同じ情報量を伝えられるよう努めた（社会）。

・毎回可能なかぎり詳細で親しみやすいオリジナルテキスト(3500~8000字程度)を執筆し、コースコンテンツにアップした。それに対するレポートを毎回提出させて、コメントをフィードバックした。これまでわからなかったことが「わかる楽しさ」を学生に感じられるよう留意した（社会）。

・前年度までのスライド教材を生かしながら、ほぼすべて作成し直しました。なるべく語りかけるように説明し、考えてもらうように問いかける、非言語要素(イラストなど)を追加する、などの工夫をしたのですが、学生からはわかりやすかったという意見が多く、期待水準には達していたと感じます。一方で、読む量が多いという感想もありました（社会）。

・オンライン授業は対面授業より集中力が落ちやすいので、講義内容が多くなりすぎないように気を使った（流通情報）。

・ゼミを含む全ての授業で、授業中に休憩や雑談を入れたり、授業時間をやや短めにしたりした（流通情報）。

・メディアなどでのオンライン授業に対する評価では、資料配布型授業は「手抜き」とされることが多いようだが、思いのほか学生からはそのような声は出ていなかった。資料の最初に雑談や余談の部分を意識的に設けたことと、毎回提出された課題のなかからいくつかをピックアップしてフィードバックを行ったのがよかったのかもしれない（流通情報）。

・対面授業と同等内容を文書にすると、おそらく量が多すぎてついてこれない学生が多数いるようで、脱落者が多く出る。そのため、内容のスリム化に努めるようにした（法）。

・通常のレジュメとは別に普段の講義の語りを意識したスライド資料を用意した（法）。

・オンデマンド授業では、伝えたい点を厳選し、できるだけシンプルな授業を心がけました（スポ健）。

・スライドを文字ばかりにせず、イラストや図表を多めに取り入れた。学生には、イラストや図表を多く入れたことは高評価でした（スポ健）。

#### ●宿題を毎回あるいは頻繁に出す

・manabaの小テスト機能を用いて、出欠と到達度の確認を毎回行った。10回分の小テストの得点の合計によって、最低限保証される成績の等級が決まるようにした（より上位の等級

の成績を得たい者は期末の定期試験を受験する)。コツコツと努力を積み重ねることで、より良い評価が得られるという仕組みにした(経済)。

・manaba 小テスト機能のドリル形式で毎回確認クイズを用意し、設定した合格点をクリアすることで、出席とみなすこととした。合格点の設定で達成感を得られた、繰り返し回答できるドリル形式であったことで学習に取り組んだという実感を得られた等、概ねポジティブな感想を学生から得られた(社会)。

### ●迅速かつ丁寧にフィードバックする

・レポート課題を毎回出し、個別にコメントを返し復習を促し、質問にも丁寧に答えた(経済)。

・毎回、確認テストを実施し、次の授業でその解説・補足説明を行うことで、フィードバックを充実させた。学生からもフィードバックがきちんとなされていることに肯定的な評価が多かった(経済)。

・毎週、課題として授業の感想(500文字程度)と小テスト(3問、自動採点、選択式)を行い、感想は5点、小テストは3点満点で評価しました。遅くとも10日で採点を終え、学生に公開していました。感想の中に質問なども書いてもらい、それに返信する形でコミュニケーションを取りました(経済)。

・毎回ドリルやアンケート、レポートの3つのうちの1つか2つか3つを組み合わせる課題とする。レポートには個別にフィードバックする。よくチェックしている学生からは好評だったが、あまりチェックしていない学生はたぶん気にしていない(社会)。

・講義において毎回記述式の小テストを実施し、回答に対して個別にコメントをつけました。これにより、学生は修正や追加を実施して理解度を深めることができたと考えています(法)。

### ●資料のアップロードや課題の提出締め切りをルーティン化する

・毎週月曜日に学習資料をすべてアップロードしました。また、課題の提出締め切りを、毎週木曜日の23時59分に設定しました(経済)。

### ●情報にアクセスする際の導線を設計する

・manaba の掲示板には、授業に関する情報(授業内容変更の通知や成績についての注意喚起、課題に対する注意喚起)を投稿していました。コースニュースには、毎週の授業で必須のタスク(学習内容)を記載し、学生に明快に理解できるよう配慮しました。また、コンテンツではPDF資料、YouTube動画資料(オンデマンド形式)へのリンクを毎週配置しました(経済)。

・manaba のコースニュースの閲覧数が低下傾向にあった。そのため、途中からすべてアンケート欄にまとめてアップした(社会)。

## ●オリジナルの動画・音声ファイルの作成、授業のライブ配信の実施

- ・講義科目については、対面式で行っているときとほぼ同等の内容で解説映像を作成した。演習科目については、基本的に Zoom を用いてリアルタイムで指導した（経済）。
- ・オンデマンド配信やリアルタイムオンライン授業も、回数は少ないが取り入れた。学生からは理解の助けになったとの声があったが、一方で情報環境が十分でない学生に対するケアも必要と考える（経済）。
- ・資料に直接書き込みながら解説する動画を配信しており、概ね好評である（経済）。
- ・毎回 70 分~120 分ほどの動画(2~3 分割)を制作し、YoutuTube に限定公開としてアップロードしました。動画では PDF 資料を共有しながら、ワイプで講師自身を映し講師の表情や身振り手振りがわかるよう配慮しました（経済）。
- ・最初はレジュメの書き込み内容を充実させる形で進めていました。その後はオンデマンド方式でレジュメに加えて映像をアップして視聴する形に変更しました（社会）。
- ・未入国学生のこととも考慮し、オンデマンド式にした。Youtube 動画での授業配信をおこなった。学生からもおおむね好評だった（社会）。
- ・講義科目については、毎回、1 時間ほどの動画を作成して、それを Google Drive を用いて共有するかたちで実施した。使用したスライドは manaba で共有した。スライドに書いてある文言をただ読み上げるような内容にはせず、多種多様な図や、短くかつ細かく編集した動画資料などを随所に導入するなどして、視覚的に退屈しないような内容にするように努めた（流通情報）。
- ・長すぎると集中が途切れ、学習が継続しづらいため、音声ファイルはなるべく小分けするようにしていました（法）。
- ・オンデマンド型の動画配信を行ったため、概ね 45 分~50 分程度の動画を 2~3 個に小分けにした。ある大学の反転授業についての調査で、おおむね 10 分を超える動画は 10 分を超えたところで視聴率が有意に下がるとの結果に接したため、小分けにする努力をした(が、現実にはうまく小分けに出来ず、15-20 分程度になってしまった)。こちらの意図がうまく伝わったかはともかく、動画については小分けにしていたよかった、という評価もあり、やはりそのやり方は悪くなかったと考えている（法）。
- ・動画は、集中力を保つのが難しいため、1 回の授業内容を、20 分くらいの動画数本に分けて配信した。学生からの評価は、概ね好評だったが、それでも動画が重い、という意見があったり、すぐに質問ができないのが残念だった、という意見があり、今後の改善点であると認識した（スポ健）。
- ・動画の特性を活かし、音響やアニメーションなどを活用しました。編集には時間がかかりましたが。あまり長くせず、20 分以内の動画に収まるようにしました（スポ健）。
- ・できるだけライブ配信で実施した。オンデマンドでは、動画を見ずに、レポートを作成する学生もいる（スポ健）。

## ●既存の動画・音声ファイルの紹介

- ・選択できる動画など視聴覚資料を加えて、授業が単調にならないようにした（経済）。
- ・他の大学が公開している教育用オンライン教材の紹介などを行い、英語の発音でわからない

いものについて独学で学べるように指導を行った。また、テキストから離れて様々な英語の学習リソースを学生にみつけさせたところ、学生は思ったより積極的に英語の授業に参加した（経済）。

・著作権に配慮した動画や静止画、インターネットサイトなどのマルチメディアを、自分が作成した動画内に取り入れ、具体的なイメージが湧くようにしました（経済）。

・選択スポーツ実技は、オンライン授業では厳しい面があります。バドミントン、バスケットボール、卓球、バレーボールを実施していましたが、自身動画より、ネットに出ているサイトの方がより見やすさや理解できやすいことから、こちらを使用させていただきました（スポ健）。

### ●グループワーク、ディスカッション、学生間のコミュニケーションのファシリテーション（ライブ配信の場合）

・演習(ゼミ)に関しては、ZOOM を使ったリアルタイム配信によるオンライン授業を実施し、授業内ではブレイクアウトルームを用いたグループディスカッション、グループワーク、プレゼンテーションを度々行った（経済）。

・演習科目では、ZOOM のブレイクアウトセッション機能を活用し、学生同士が対話する機会を設けた（経済）。

・3~4人で調べてまとめ、ワードかパワポでの原稿を作成するグループ学習を導入した（経済）。

・manaba のプロジェクトを利用して、グループ課題を与えた（流通情報）。

・教材研究では、ビデオを視聴してから、zoom のブレイクアウトルームを活用してグループディスカッションをするという形を取りました。思った以上に活発な話し合いになり成果が上がったと感じました（スポ健）。

・スポコミ実習では、ブレイクアウトルームで学生同士の交流をさせる、みんなが快適にオンライン授業を受けるためのルールづくりを学生にさせる、アイスブレイクを行い、話しやすい環境を作る、TA が常に授業に参加し、1年生に身近な存在として授業以外の学生生活に関わる相談に乗れる環境を作るなどの取り組みをしていました。学期後のアンケートでは、満足度は期待していた水準に達していました（スポ健）。

### ●学習支援アプリやサービスの利用

・Flipgrid というアプリケーションを用い、学生が英語を使う場を提供した。クラスメートに対する返答をすることにより、疑似会話体験と顔を合わせる機会を設けた。概ね、良い評価を得たと思います（経済）。

・3年ゼミでは紙のテキストを電子テキスト化し(注:丸善の eText サービス)、全員に購入してもらった。eText は、3台までインストール可能なため、例えば、PC、スマホ、タブレットにインストールして使用可能。紙のテキストのように持ち歩かなくても、授業中の他、いつでも学習が可能である。授業中に忘れる心配もない。授業では輪講したが、比較的スムーズに進められた（流通情報）。

### ●調べ学習やPBL型授業の導入

- ・一方的な視聴になると疲れると思ったので、「調べ学習」をふんだんに取り入れた(経済)。
- ・PBL型授業<sup>1</sup>の方が、そうでない科目と比較して圧倒的に生徒の集中力や、課題への取り組み度合い・満足度も高かった。特に、ZOOMを用いた社会人ゲストへのインタビューを取り入れたことは学生のやる気を高めたように思う(経済)。

### ●ライブ配信以外の手段によるコミュニケーション双方向性の確保

- ・ゼミにおいて、「携帯電話(通信制限がかかりやすい契約)で授業を受けている」と答えた学生が数名いたため、Zoomでリアルタイム配信を行うことは避けていました。その代わりに、資料に質疑応答や理解したことなどを伝える枠を設け、毎回それに対して細かく回答し、可能な範囲で双方向になるように意識していました。通信環境の差について事前に説明していたこともあってか、学期の途中で学生に「Zoom授業に参加・移行したいか」と尋ねた際も、特に希望はありませんでした(社会)。
- ・毎回の課題の際に、自由に質問や要望を記入できる欄を設け、できる限り学生の要望に添えるように努めた(社会)。
- ・講義科目で毎回、課題とは別に質問をあつめました。評価対象にはしないと伝えただけで実施しましたが、半数以上の受講生が提出をしてくれました。質問を考えることは講義内容の理解にも有効だったと考えています(流通情報)。
- ・ゼミは、寮で受講していてゼミ外の学生の茶々が入ることがあったため、同時双方向の講義を行う回数を減らし、LINEで質問を受け付けるかたちにした。積極的にラインを活用する学生と自力でこなす学生とに分かれた(法)。

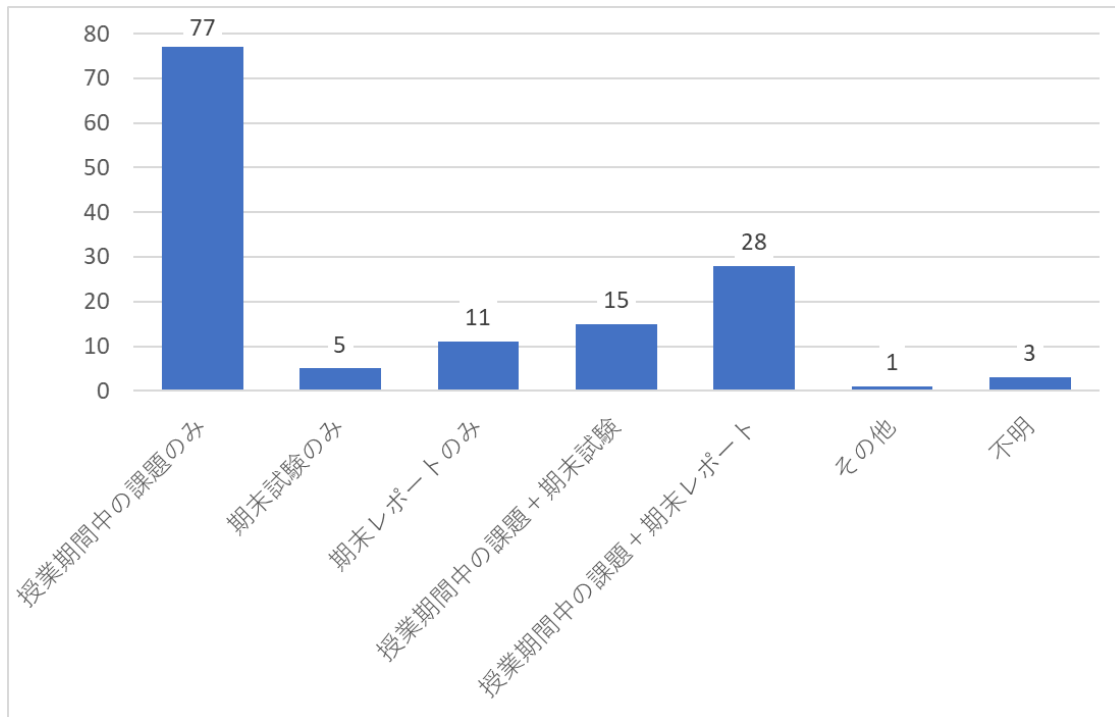
### ●現実の事例や視聴覚資料の利用

- ・保育現場の写真や事例(私が実際に撮影した写真や実際に事例に起こしたもの)を資料として載せた(社会)。
- ・学問と現実の世界のつながりを意識させるよう、授業で扱った内容に関する企業や官公庁のHPのURLをmanabaに記載した(法)。

---

<sup>1</sup> PBL (Project Based Learning) は、日本語では「問題解決型学習」「課題解決型学習」などと訳される勉強法である。

#### 4. 成績評価方法とそれに対する自己評価



- ・授業ごとに提出してもらったレポートを採点し、合格点に基づき評価した（経済）。
- ・毎回行う小テストの合計得点で最低限保証される等級を決め、それよりも上位の等級を得たい者は、期末試験を受験する。期末試験には、manaba のドリル機能を用いた。択一式の問題を 200 問ほど用意し、その問題のストックの中から、ランダムに 10 問が抽出されて、ひとつの試験を構成する。この試験を繰り返し受験し、7 点以上を得ることが 3 回できたら、保証された等級よりもひとつ上の等級が得られる。成績の等級の分布は、かなりいびつになった。保証された B で満足して期末試験を受験しない者が多く、他方で保証された A に満足せず期末試験を受験して等級を S に上げた者が多かったからである。再考の必要があるものの、到達度の全体的な向上という意味では、この評価方法は良かったのかもしれない（経済）。
- ・毎回、授業日から 1 週間以内に提出する小テスト(選択式)と、最終授業日から 2 週間以内に提出した期末試験(選択式と論述式)をもとに、成績を評価した。対面授業と比べると、授業後 1 週間という猶予期間があるためか、例年と比べて提出率ははるかに高かった。小テストについては、難易度を昨年までの期末試験と同じ水準としたところ、点数が非常に高く出て S や A を多く出してしまいました。特殊な状況ただだに成績の状況もいつもの年とは異なってもやむを得ないとは思っているものの、ちょっと甘くつけすぎた感はありません（経済）。
- ・講義科目についてはテストバンクからランダムに出題し、回答上限無制限の最終試験を課した(最高点を評価点とする)ところ、極めて熱心に取り組む学生が散見され、成績の概ね向上した。学修意欲の涵養と学修成果の達成に一定の効果があったと考える（経済）。
- ・ビデオの課題提出、小テスト、出席、Google Meet によるスピーキングテストによる総合

評価。コンスタントに努力をする学生には公平な方法であったと思います（経済）。

- ・13回の小テストのうちの成績の良い9回分の点数の平均点で評価した（社会）。

- ・毎回の小テスト(平常点代わり)と、数回の実験レポートで評価をおこないました。レポートでは、全ての誤答について「何がどのように誤っているか」「該当する内容はどこに書いてあったのか」などのコメントをつけました（社会）。

- ・毎回の小テストまたはアンケート欄への入力状況や内容等を50%、期末課題を50%として評価した。期末課題は3題とし、1か月の解答期間とした。十分な入力期間を設けたにも関わらず、PCの不具合・通信環境の事情で入力できないなどの問い合わせ等があった。今回はすべて申し出については考慮したが、本当にそのような事情であるのかは分からない（社会）。

- ・毎回のmanabaアンケート課題40点、まとめの課題20点、グループの企画書20点、個人の授業参加度20点で評価した。manabaアンケート課題とまとめの課題は、正答数とコメント内容で評価した。グループの企画書はその内容について評価した。授業参加度については、manabaへのコメント書き込み数と内容で評価した。上記の評価方法で概ねうまく機能したが、グループにうまく参加できていないような学生がいたため、そのような学生には別に課題を設けて評価を行う対応をした（社会）。

- ・毎回の確認クイズの得点、出席状況、これらに加えて、期末試験としてmanabaの小テスト機能を用いた記述形式の試験を行い、評価をした。確認クイズの得点(平常点)についても繰り返し回答できるドリル形式での得点であったこと、期末試験もオンラインでの持ち込み可の実態での得点であったことで、成績の分布が昨年までより分散しなかった（社会）。

- ・manabaに毎回小テストをアップして1週間以内に提出してもらい、最後に700字程度の課題4つを付したレポートを提出してもらって評価を行いました。テストの代替として行ったレポート課題が分量の多さから提出を行わなかった学生が多くみられたのは反省点です（社会）。

- ・定期試験がないため、期末レポート2つにより評価しました。提出、文字数、内容など評価要素は決めたものの、筆記テストほど大きな得点差にはつながらず、成績は例年よりも高評価が多くなりました。成績評価方法は、あまりうまく機能しなかったと感じますが、履修生の人数が多いためやむをえなかったと感じます（社会）。

- ・小試験や課題提出を行い、「形成的評価」<sup>2</sup>を行った。期末レポートにはルーブリック<sup>3</sup>を用い、自分でレポートを確認できるようにした（社会）。

---

<sup>2</sup> 形成的評価 (formative evaluation, formative assessment) とは、様々な教育活動の途上で、その活動が所期の目的を達成しつつあるかどうか、どのような点で活動計画の修正が必要であるかを知るために行われる評価活動である。

<sup>3</sup> ルーブリック (rubric) とは、学習到達度を示す評価基準を、観点と尺度からなる表として示したものである。主に、パフォーマンス課題における学習者のパフォーマンスの質を評価するためのツールとして使用される。ルーブリックを用いると、評価者による評価の偏りを少なくし、明示された評価基準によって、より細かな評価をすることができるとされる。

- ・基本的に、授業ごとのレポートと、期末レポートで評価しました。おおむねうまく機能したと考えています（流通情報）。
- ・毎回の manaba 課題と最終レポートで評価した。例年よりもオンライン講義で課題に取り組みやすかったためか、課題提出率は向上した(オンライン講義の特性で課題の締切が長かったことも影響していると思われる)ため、総じて成績評価は高くなった（流通情報）。
- ・事前に、全科目ループリックをシラバスに提示し、また第1回の授業ガイダンスの時にもループリックの説明を行った。出席状況、manabaの小テストの提出状況、manabaのレポート提出状況、学期末レポートにもとづいて評価した（流通情報）。
- ・完璧なループリックではないものの、評価基準を定め、それを数値化することで、学生が到達度を視覚化できるようにした（流通情報）。
- ・毎回実施している簡単な演習の状況を平常点(30点満点)とし、それに中間レポート、期末レポートの合計得点(70点満点)を加えて評価した。実践講座では、講師への質問を積極的に行った場合に若干の加点も行った。手間はかかったが、特に不具合はなかった（流通情報）。
- ・毎回の課題提出と期末レポートでの評価とした。毎回の課題で少しずつ論理的な文章を書く型を習得してもらい、最終的にそれを期末レポートに活かせるようにしたが、期末レポートに関しては箇条書きのような形で提出してくる学生もいたので、課題の出題方法に関してはもう少し工夫が必要だったかもしれない（流通情報）。
- ・今回は期末試験によることができなかつたため、レポートとした。しかし、「コピペ」事案が少なからず発生した。レポート執筆方法についてより一層徹底して指導する必要性を痛感する（法）。
- ・レポートとオンラインテストで評価した。オンラインテストは実際に誰が受験しているかわからないこと、また接続環境などによって提出が出来なかった等のトラブルが発生したので、後期は採用を見送ろうかと考えている（法）。
- ・毎回の講義における小テストの平均点とレポートの点数を勘案して成績を評価した。ある程度機能したと考えていますが、小テストの回答期間を毎回1週間とっていたので、回答率が高くなり、結果的に好成績者の割合が例年より増加したと思います（法）。
- ・毎回行うアンケートへの回答(新聞記事などを読んで意見を書いてもらう)、毎回の小テスト、書いてもらったショート・レポートの評価を基に成績を付けました（法）。
- ・毎回の授業での課題を踏まえて評価しました。ループリックは作成していませんが、事前に評価基準は示しました（スポ健）。
- ・①授業参加と授業後アンケートおよび②レポートとプレゼンテーションにもとづいて評価しました。概ねうまく機能したと思います（スポ健）。
- ・講義科目の成績を、授業内課題と期末試験(オンライン)で評価した。特に問題なかったが、期末試験は、自由に資料を見て解いてもよいとし、かつ1週間の提出期間を設けていたため、過去の同科目より成績優良者が倍増した（スポ健）。
- ・基本的には毎回の提出物で8~9割評価し、残りの1~2割をやる気がある学生がとことん取り組める内容の課題を与えました。概ね、問題なかったように思います（スポ健）。



## 5. 学生アンケートの結果を踏まえた改善計画

- ・春学期の授業アンケートで、数人の学生から動画の公開を希望する声があがったため、秋学期は動画を公開してレジュメプリントを書込み式に変更している（経済）。
- ・春学期は小テストの解説をする余裕がなかった。秋学期はそれを加えたりして、より丁寧に説明をしていきたい（経済）。
- ・他の学生のワークの内容を共有してほしいとの要望があったので、優秀な学生のワーク内容をオンデマンドでシェアする（経済）。
- ・春学期は、小テストの難易度が高かったため、動画を視聴して小テストを受験した学生と、動画を視聴せず小テストを受験した学生の間で、点数の差がつきにくかった。秋学期は、小テストの難易度を下げるとともに、動画の中で、キーワードを発表して、それを小テストで入力させている。これにより、動画を視聴したか否かによって、小テストの点数が大きく変わるようになった。結果、動画の視聴率が改善したものと思われる（経済）。
- ・小テストに対するモチベーションをさらに高めるために、学期末テストをなくして、平常点と小テストのみを秋学期の成績評価の基準にしようと思っている（経済）。
- ・昼休みなどに「コミュニケーションタイム」を設け、授業の質問や学生同士の交流の機会を作り、授業への取り組み意欲を高めたい（社会）。
- ・オンラインで提供する課題に音声を吹き込みたいと思っている。ただし、業務が多く授業の準備に音声を吹き込むための時間を確保できないのが悩みである（社会）。
- ・学生との双方向性のある授業を展開するため、可能な範囲でリアルタイムオンラインの方法を取り入れたい（社会）。
- ・学生がコミュニケーションをとりたがっているようにアンケート結果では見受けられるので、そのあたりを改善する（社会）。
- ・オンデマンド型としての実施方法に必要以上配慮しすぎてしまった。オンデマンド授業でも、従来の対面でおこなったように、厳格に課題の締め切り等を設定したい（流通情報）。
- ・ゼミにおいて、オンライン会議アプリのブレイクアウトルームを利用していきたい（流通情報）。
- ・オンライン講義では、無言の時間が作りづらく、時間ギリギリに詰め込むような授業形態になってしまった。学生からそれについての不満があったわけではないが、リアルタイム授業運営をもう少しゆとりを持って行う予定である（流通情報）。
- ・ハイフレックス型の授業<sup>4</sup>を検討している（流通情報）。
- ・春のゼミでは、オンライン授業ツールが使いこなせていなかったため、グループワークができなかった。秋学期の3年ゼミは、当初計画通り、グループワークを行い、学生間で話せる機会を持てるようにしたい（流通情報）。
- ・プログラミング演習の授業で、Web カメラで手元を写して一緒にプログラミングを行う

---

<sup>4</sup> ハイフレックス (HyFlex) 型授業とは、Hybrid-Flexible の略で、対面・同期オンライン・非同期オンラインが提供され、学生が自在に選択することができる授業形態である。

などの工夫を試みたい（流通情報）。

・通信環境の整備もある程度進んだ秋学期では、学生の興味関心をより高めるために、音声や動画を用いた授業をするようにしている。また課題に対するフィードバックも、学生のモチベーションを保つ効果があるようなので継続している（流通情報）。

・オンデマンド型授業については質問をしづらい問題を解決するために、定期的に同時配信により質疑応答の場を設け、双方向性を向上させることを検討しています（法）。

・毎回のレポート添削は労力を要するわりに、この講義をどうでもいいと思っている学生には全く必要とされていないように思う。教員がレポートを評価するのではなく、学生同士の相互評価の機会を設けても良いように思った（法）。

・一部の学生につきましては、講義動画を視聴せずにコースコンテンツの資料だけを見て小テストに回答したという印象を受けています。このことから、必ず動画を視聴しなければ回答できないようなことについて検討したいと考えています（法）。

・これまではライブ配信のみだった。オンライン会議アプリのレコーディング機能を活用して、オンデマンドで再学習できる機会を創出する（スポ健）。

・実技や実習の授業はやはり対面授業が必須だと思います。今後も対面授業の回数が制限される場合、限られた対面授業をどのように充実させるかを念頭に授業計画全体を見直したい（スポ健）。

## 6. 特別な配慮が必要な学生への対応

### （1）身体的あるいは精神的な障害のある学生への対応

・聴覚障害がある学生のため、動画を Youtube にて公開し、自動字幕機能を活用して学修できるようにした。ただし、Youtube の字幕の自動翻訳精度が高くない点に問題が残る（経済）。

・毎回かなりこだわりの強い発達障害を疑われる学生が数人いる。攻撃性が強く苦慮することが多い。同じくらいの割合で、文章が書けないほど学習能力の低い学生が数人いる。句読点が付けることができないし、文章の中の主語と述語が呼応していない。短いコメントをして、アドバイスをしている（経済）。

・自閉症スペクトラムの学生について、小テストの提出期限を柔軟にするなどの配慮を行った（社会）。

### （2）極端に消極的な学生やモチベーションが低い学生への対応

・オンラインリアルタイム授業を行うときには、マイクオフ、カメラオフで実施しました。チャットの書き込みはしてくれたのでなんとか意思疎通がありました（経済）。

・ZOOM に入りたがらない消極的な学生に対しては、LINE の OPEN CHAT 機能を使い、コミュニケーションをとるよう努めた（社会）。

・4年演習では、コロナ禍や進路選択などに起因すると思われる、授業参加・卒論執筆に対する著しいモチベーション低下が見受けられる学生もいた。これが顕著に表れた学生については、教育学習支援センターと連携して対応を行った。その甲斐あってか、現在では、少

しずつ卒論執筆を進められる状態となっている（流通情報）。

### （3）留学生への対応

- ・未入国学生に関しては個別対応をおこなった。授業以外のケア(教科書の郵送や電子書籍化の手配、学習の相談を授業時間外でも対応)をした（社会）。
- ・ゼミの留学生については、個々に zoom 等で面談を行った（社会）。
- ・留学生が中国に留まっているという例はありました。（中国国内では使えない）Google のサービスを使わないことで何とかやっています（法）。
- ・中国の留学生は、途中からまったくアクセスしなくなりました。個人のモチベーションによるものなのか、中国国内のアクセス環境によるものなのかわかりませんでしたので、国際交流センターへ情報を提供し、支援をお願いしました。その後どのようにご対応いただいたのかはわかりません（スポ健）。
- ・日本語能力の低い留学生に対して、授業内容は日本語以外に大事なところに英語の字幕を添えました。また、国際交流課から連絡してくれた入国できない留学生に、個別でメール連絡して、メール添付で授業内容を送付しました（経済）。
- ・授業コンテンツを資料と動画で配布したのだが、留学生からはわからないところを何度でも確認できてよかったとのコメントがあった。このことについては予期していなかったが、繰り返し授業を見れることは、特に留学生にとって助けになったのではないかと思う（流通情報）。
- ・必修科目で、日本語が必ずしも得意でない留学生が 4 名いた。このため第 1 回の導入部では、オンデマンド講義の英語版と韓国語版(パワポが韓国語で話は日本語)をそれぞれ制作した。必修である以上、多言語対応はいずれにせよ必要になっている（スポ健）。

### （4）その他

- ・対面ではないことで極端に不安になる学生がいます。課題の提出ができていないか、出席ができていないか、毎回確認のメール等がきます。毎回対応して可能な限り不安を払拭しようと試みましたが、本人のパーソナリティもあるとおもいますので、必ずしも安心できる環境にはならなかったかもしれません。教学支援センターなどのバックアップがあるとよいかと思えます（スポ健）。
- ・秋学期から、上級生が下級生をサポートできる、TA 制度の利用を予定している（経済）。

## 7. 対面授業の教育効果や本学の魅力を高める活用方法の提案

### (1) 対面授業の教育効果を高める手段として<sup>5</sup>

#### ●学習支援の容易化

- ・manaba のテスト機能やドリル機能をこれまで用いていなかったが、今回使ってみて学生の学習習慣の形成を助けるのにかなり使えると感じた（経済）。
- ・日本語能力の低い留学生だけでなく、通常の学生にとっても、画面上に音声認識ソフトを活用し、話した内容を文字情報として画面に映し出すことで、理解度が進んだように思います。集中力がとぎれても画面上に文字が残っているので理解しやすいそうです（社会）。

#### ●個別指導の容易化

- ・ゼミや語学科目では、かなりきめ細かく学生の個別指導ができ、その点はオンラインの強みを感じた（経済）。
- ・卒論の添削指導は、zoom の画面共有でやり取りするのが効果的だったと思った。4 年次は遠方の実家から週 1 回通う、といった学生に、卒論指導のために授業日以外に何度も通わせるのは時間的、金銭的に気の毒なので、そうしたケースではオンラインによる添削指導は有効だと思う（社会）。

#### ●反転授業の容易化

- ・manaba で講義動画視聴→それをもとに授業時間外で自宅で調べ学習→課題提出、という流れにすると、学生の毎回のコメントの量と質が、格段に向上しました。もしかしたら、大講義タイプの授業は、こういうやり方のほうが、教育成果が高くなるかもしれません（経済）。
- ・オンライン会議(授業)システムによる、グループワーク(ブレイクアウト)は補完の可能性を感じた。特に時間と場所の制約がある場合において、対面授業は導入と発表の場とし、グループワークはオンライン会議(授業)システムで行う方法も 1 つの形態と考える（経済）。
- ・いわゆる反転授業的な授業手法を導入することは可能かも知れないと考える(基礎知識の習得はオンデマンド型の動画/録音コンテンツに委ね、授業では問題演習や質疑応答、報告討論に重点を置く)。そのためには授業一クラスあたりの人数を限定することが必要になると思われる。全ての科目で導入することは難しいと思われるが、基幹的な科目を中心に組織的にこうした手法の開発・導入は検討されてよい（法）。

---

<sup>5</sup> 本文ではオンライン授業の積極的な利用に関する肯定的な意見のみを取り上げたが、慎重な意見や否定的な意見ももちろんあった。例えば、「対面講義を上回るかというと懐疑的な部分も多い、あくまで現段階では対面講義の補完として利用すべきである（流通情報）」、「スポコミ実習については、学生の授業後アンケートの結果を見ても、対面での教育効果をオンラインで補完は出来ない（スポ健）」等。

### ●グループワークの容易化

- ・manaba のプロジェクトをグループワークで活用した。通常の対面授業では紙ベースで行う予定だったが、進捗状況がデータとして残るため、学生もデータで確認できたのは便利だったのではないかと思う。授業参加度を評価するのにも役立った（社会）。
- ・manaba のプロジェクトを使用することで、多様な学びができると思う（流通情報）。

### ●情報の取得や共有の容易化

- ・manaba では、全員の提出課題を簡単に共有できる。他の学生の意見を読み、考えを広げることができたと思います（社会）。
- ・質問をチャットであつめることは、挙手制よりも学生の心理的ハードルが低く、効果的だと感じました（流通情報）。

### ●時間的・空間的な制約の緩和・解消

- ・コロナ禍が落ち着いたとしても、大人数が受講する講義に関しては、対面授業よりもオンデマンド配信によるオンライン授業の方が良いかもしれない。学生は自分の都合の良い時間に受講でき、何度も繰り返し映像を見て学習することができるからだ（経済）。
- ・通常の授業が再開しても、講義を録画して後から見るようにするとよさそうです。体調不良で大学に来れなかった学生などは録画をオンラインで確認することができます（経済）。
- ・オンデマンドは、今後も活用すべきと思いました。大会や合宿などが多いスポーツ健康科学部には特に有用だと思います（スポ健）。
- ・例えば、フィールドワークを取り入れられる授業については、学生が全国(または世界)の自由な場所からオンラインで同じ時間に集まったり、学外の方(交通費の関係で大学に呼ぶのは難しい方)など、遠隔地とつないだ授業は、コロナに関係なく進めていくと良いと思います（経済）。
- ・オンライン会議アプリを使えば、対面授業ではお越しいただけない遠隔地の方とコミュニケーションが可能である。秋学期は、山形県の方と大阪府の方とを繋いで、授業に参加していただく予定だ。また、遠隔地に居る卒業生や現役学生とコミュニケーションが取れる（社会）。

### ●より自由な授業計画

- ・他学部がワンキャンパスとなっていく一方で、経済学部は、大学全体の事情からツーキャンパスを維持せざるを得ないと考えられる。もし、キャンパス選択制の抜本的な改革が望めないのであれば、経済学部では、龍ヶ崎キャンパスに関して、オンライン授業の積極的な導入を認めて頂きたい。特に、講義科目については、ハイブリッド授業の可能性は十分にある。例えば、新松戸で講義をしている様子を ZOOM 等で龍ヶ崎キャンパスに配信する、あるいは、オンラインで配信する(録画配信含む)という形である。学生からの質問は、チャット機能で受け付けることができる。ここ数年、本学では、新松戸キャンパスに比べて、龍ヶ崎キャンパスの特徴が乏しく、茨城在住の学生ですら、新松戸キャンパスに通うという状況が見

られる。そうしたなかで、オンライン授業の積極的な導入を(スポ健を除く)龍ヶ崎キャンパスの特徴とすることも考えられるのではないかと(経済)。

### ●より自由な履修計画

- ・オンデマンド講義の場合なら、授業の時間がかぶっていても取れるようにできれば良いのではないのでしょうか(経済)。
- ・補講を5限等に行うとアルバイトの時間と重なり出席しない学生も多いので、補講をオンデマンド式のオンライン授業で行うのはありなのではないかと感じた(法)。

### (2) 本学の魅力を高める手段として

- ・会議ツールを使った遠隔授業は、遠隔地の高校での模擬授業にも活用できる(経済)。
- ・オンライン授業(動画)を期間限定でもいいので、WEBオープンキャンパスのような形で潜在的な入学志願者に視聴できるようにすることが良いと思う。高校生も大学の生の授業や教員について知るきっかけになると考える(社会)。
- ・入学志願者向け(高校生向け)に、大学生向けのオンライン授業をそのまま転用することはできないと考える。なぜなら、大学生は単位取得のためにやむなくオンライン授業のコンテンツを見るが、高校生にはそのような義務はないので、相当魅力的なコンテンツでない限り、2・3分以上の視聴は期待できないと思われる。それは、自分たちがテレビ番組や動画を見るときでも、面白くなさそうであればすぐに違う番組にチャンネルを変えるのと同様である。したがって、オンデマンド式のオンライン授業を入試に活用するならば、それ向けに計画と準備をしなければならないと思う(法)。

### (3) その他の手段として

- ・オンデマンドのビデオなどは学部や学科で集約し蓄積できるようにすると、講義のアーカイブとして将来の役に立つ(スポ健)。
- ・他大学の授業履修(単位互換制度)も可能とすることが良いのではないかと思う。オンラインであれば、自由に他大学での科目も履修することが可能であるし、学習内容の拡充も期待できる(社会)。

## 8. 学生アンケートに関する要望

### (1) 実施方法に関する要望

- ・PDCAサイクルを回すためにも、学期の途中で1度行い、その結果をもとに改善案を提示し、改善案を実施することはできないでしょうか。
- ・すべての授業が終了してからのアンケート回答であったため、オンラインでその作業に従事する、わずらわしさから回答しなかった者が多かったのではないかと。
- ・もう少し実施期間の幅を広げてもらいたいと思います。できれば他校がどの程度の期間をとってアンケートを実施しているのかを確認していただきたいです。
- ・アンケートを簡略化して、回答率を向上させた方がいいと思う。

- ・改善の参考にする情報を得るために、自由記述欄を増やしてほしい。
- ・紙ベースからネットでの実施に変更になり、回答数が減ったように感じる。システム上は、匿名での回答となるかもしれないが、学生にとってみると、個人が特定されかねないと思っているのかもしれない。
- ・出席率が悪い学生の回答は除外するか、回答できないような対応を期待したい。
- ・正当な批判は受け入れますが、思いつきや感情で投げかけられる無記名の批判をそのまま受け入れることには抵抗感を覚えます。
- ・授業のオンライン化に伴って必要になるはずの準備を、学生側がどれだけできていたのかを把握するための質問がなかった。

## (2) 集計・報告方法に関する要望

- ・締め切り後、教員がアンケートのエクセルファイルをダウンロードできる状態にしてもらえると、速やかに次の学期の授業設計に反映させることができると思うので(特に記述回答はその必要性が高いと思う)、ぜひご検討いただきたい。

以上